

種生物学学会 ニュースレター

THE SOCIETY FOR THE STUDY OF SPECIES BIOLOGY NEWSLETTER

July 2001

目次

執行部より：新・学会会長就任の挨拶	1
第32回種生物学シンポジウム	2
シンポジウム体験記	
ポスター発表の記録	
総会の報告	
Plant Species Biology：新・英文誌編集委員長就任	9
種生物学研究：編集報告	9
書評：日本のタンポポとセイヨウタンポポ（小川 潔 著）	10
新入会員・会員異動	11
会費納入のお願い	12
編集後記	12

執行部より

新・学会会長 就任の挨拶

会員のみなさん、こんにちわ。矢原さんから引き継ぎ、これからの3年間会長をお引き受けしました。非力な点はみなさんのアイデアをいただいてカバーしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

自己紹介をしますと、私はタンポポの研究者です。タンポポ属では2倍体が有性生殖、倍数体が無融合生殖を行います。2倍体を母親として倍数体の、例えば3倍体の花粉を受粉させると、3倍体または4倍体の子どもができます。この現象を前提として、5倍体のシロバナタンポポがカンサイタンポポ（2倍体）とツクシロタンポポ（4倍体）の交雑起源であることを明らかにするというような、日本産タンポポ属の倍数体種分化の研究を行ってきました。最近では庶務幹事の芝池さんと一緒に、在来2倍体種とセイヨウタンポポ（3倍体）の雑種形成の問題に取り組んでいます。これは、倍数体種分化がまさに今、起こりつつあるのを研究できるという点でホットなテーマなのです。

種の研究には広大な未開拓の分野が残されている

種生物学学会会長 森田竜義

富山で開かれた植物実験分類学シンポジウム（種生物学シンポジウムの前身）に初めて参加したのは、私がドクター1年の時でした。たしか、第2回だと思えます。初代会長の河野昭一先生が主催した30人ばかりの小さな集まりでしたが、シンポの話題提供や討論もさることながら、宿舎に泊り込み、寝る間も惜しんでしゃべりあったことが、私の研究の原動力になりました。タンポポの研究はなかなか進みませんでしたが、シンポジウムに参加して、新鮮なエネルギーをもらうことができたのです。

当時、河野さんや堀田満さんが掲げていた主張、それは「生きた種の実態を具体的に研究すること」でした。この姿勢が植物分類学にも生態学にも欠けていたのです。学問の現状に対する不満や批判を共有していたことが、このシンポの特徴でした。もう一つの特徴は、分類学や生態学だけでなく、遺伝学、植物生理学、育種学、林学、作物学、雑草学など、分野の違う人々

が一同に会して刺激しあう場であったことです。それから30年がたち、種生物学会の様相も大きく変化してきましたが、私はこの2つの特徴を学会の原点として大切にしたいと思っています。

近年の種生物学会のリニューアルぶりには目覚ましいものがあります。ブラックウエル社へのPSB委託出版、種生物学研究の単行本化、国際学会の開催等々。PSBは外観も一新され、サーキュレーションの向上、内容の充実という委託出版の効果は確実に現われてきています。単行本の発行はシンポの内容を会員や社会に還元し、なによりも書き手の意欲をかきたてるという効果をもたらしました。しかし、一方では財政的負担が学会運営に大きくのしかかってきていることも事実です。そのため、来年度から会費を値上げせざるをえないという事態に至っています。

それでは今後どうするのか。私の抱負を一言で言いますと、地道に学会の基盤を固め直したいということです。そのために、次の4点を重視したいと思います。(1)シンポジウムのテーマの会員からの公募：種生物学シンポジウムには勉強会という性格が色濃くあります。会員がどのような話を聞きたいのかをテーマの決定に反映させる必要があります。芝池さんが近く立ち上げてくれるそうですが、学会のホームページを活用して自由に書き込めるようにしたいと思います。(2)ポス

ターセッションの充実：各自の研究を通じての交流を活性化するため、ポスター発表への参加を増やし、時間も十分に保障したいと思います。(3)会員のPSBへの投稿の促進：PSBがなんとなく疎遠になってきたという声を聞きます。この雑誌を自分たちのものと感じられるようにするためには、何といっても自分たちの論文を載せるのが1番です。(4)財政の立て直し：林会計幹事が知恵をしぼってくれていますが、当面は滞納の一扫やバックナンバーの売却など基本的なことをやるしかないと思います。投稿促進や財政再建など、会員のみなさんのお知恵を拝借したいと思います。

分子マーカーという有力な道具を使うことが可能になり、種の研究が飛躍的に発展する条件は整ってきましたが、忘れてならないのは、植物の種に関するわれわれの知識がまだきわめて貧弱であるということです。例えば林床に生育するA種ときわめて近縁なB種が林外の陽地に棲み分けているというような場合、なぜA種は林外に出てこないのか、逆にB種はなぜ林の中に侵入しないのかといった、こんな単純そうな問題だって、解けている場合はむしろ少ないのです。「生きた種の実態を具体的に研究する」という最初に掲げられた目標は、まだ開始されたばかりであり、種の研究には広大な未開拓の分野が残されていると言えるのです。夢を持って進んで行きましょう。

第32回 種生物学 シンポジウム

至 2001年2月9-11日
於 八王子大学セミナーハウス

シンポジウム1

植物の多様な”かたち”と生理生態学

オルガナイザー：可知直毅（都立大）

イントロダクション

生理生態の目から見た近縁系統間の関係

陰葉よりも陽葉が厚いわけ

木本植物の高CO₂への反応

光をめぐる林床植物のかたち

群落光合成—葉の集合としての群落・個体の集合としての群落

光環境変化に対する地下部/地上部比を介した植物の順化反応

植物個体のトータルデザインの究極要因と至近要因

可知直毅（都立大）

久米 篤（九大）

寺島一郎（阪大）

小池孝良（北大）

村岡裕由（岐阜大）

彦坂幸毅（東北大）

谷 享（都立大）

館野正樹（東大）

北海道大学大学院 農学研究科 博士課程 松木佐和子

2月の初め、たしか梅がちらほらと咲いていた季節に第32回種生物シンポジウムが八王子セミナーハウスにて開催されました。私にとっては今回が初めての参加です。

第1日目は「君は何を測っているのか?」というセッションで始まりました。生理生態屋さんは(可知先生曰く)おたつき一集団なので、何かと色々な「おもちゃ」(測定機械)を使いたがります。しかし、何をどのようにどんな目的で測っているのか?という一見初歩的な問いの本質を見極められている人は意外と少ないのかも知れません。岐阜大の村岡さんは光1つを測るにも様々な手法があり、目的によって手法を的確に使分けなければならないことを提示されました。また、生理生態屋ならずともみんなにひっぱりダコの携帯光合成測定器LI-6400について測定中の注意点などを含めて説明して下さいました。現在は測定器の操作が非常に簡便になっているので何かと疎かにされがちですが、光合成という1つの反応は様々な要因、様々な過程を経て引き起こされていることを常に頭において測らなければ正確な測定はできないことをもう一度肝に命じようと思いました。東北大の彦坂さんは、OHPにおちゃめなフォントを用いて、難しいクロロフィル蛍光の話をとでもわかりやすく講義して下さいました。夕食後のプログラムはまるでデパートの実演販売コーナー(とまでは言いませんが。。)の様子を呈し、さらにマニアックな話が展開されました。森林総研の石田さんによる命がけの(?)プレッシャーチャンバーの測定法や村岡さんの携帯光合成測定器の測定法の説明では、失敗談を含めてかなり具体的な意見が活発に交わされました。その後、夜遅くまで議論もしくは談笑が続いたことと思われませんが、私は遠い北の国北海道からの旅の疲れもあったので、入浴後部屋に戻りました。入浴中、花と訪花昆虫の研究のために北海道をフィールドにしている女性研究者と北海道の話で盛り上がり、たまたま出会ってお話できた方でもこれだけ共有できる情報があるのだと知って驚きました。これも合宿形式学会の1つの醍醐味です。

2日目は「植物の多様なかたちの生態学的意義」をテーマに8人の方々に講義をしていただきました。特に印象的だった講義をあげさせていた

だくとすれば、九大の久米さんによる「生理生態の目からみた近縁系統間の関係」です。生理生態的手法は、種という概念を越えて、ある環境に対する機能・構造という面から統一的に森林構造を評価できるという可能性を提示しておられました。1つの森林を一般人の目、分類学者の目、生理生態屋の目、林学関係者の目を通すとこれだけ違うという図を示していたのには、思わずうなづいてしまいました。東北大の彦坂さんによる「群落の光合成 葉の集合としての群落? 個体の集合としての群落」では、進化的に安定な戦略(ESS)を予想する上で、個体間相互作用を定量化することが不可欠であることを提示されました。群落の光合成の問題は、古くて新しいトピックであることを再認識しました。他にも阪大の寺島さんによる「陽葉はなぜ厚い?」という一見素朴な疑問もこれだけ奥の深い理由が積み重なっていることを知り、1つの現象をとことんまでつきとめる重要性を感じました。

2日目の夜は恐れていた(?)ポスターセッションが行われました。参加者100人以上に対して14人のポスター発表というのはどういう状況なのか想像がつかかねましたが、みなさんビールを片手に(という方も多少おられました。)真剣にポスターを見て、意見を下さいました。実は数日前まで分析を行っていた私はとても皆さんにお見せできるような状態にポスターを作り上げることができなかったのですが、「食べられることに意義がある?」という妙なタイトルも手伝ってか、「ほんとに意義があったの?」など様々なご批判、ご意見、エールをいただくことができました。厳しい意見には(それが凶星だけに)一時はカチンと来るものですが、そういう意見こそ印象的に頭に残り、次の研究に生かせるものです。また、同じ興味を持っておられる研究者からの暖かいエールは、研究を続けて行く中で大きな助けとなります。

種生物シンポジウムの3日間は合宿形式ということもあってなかなかdeepでしたが、非常に有意義な時間でした。大御所のお話を聞くこともできれば、そんな方々を身近に感じることもできるこのシンポジウムは、特に若い研究者に非常にお奨めな場だと思いました。

シンポジウム 2

種生物学の 21 世紀をうらなう

オルガナイザー：横山潤（東北大）・加藤真（京大）

イントロダクション

無配生殖種トウゴクシダの起源と遺伝的多様性

シダ植物の分子 α -分類

細菌からタバコ属植物への Ngrol1 遺伝子群の水平移行

- 分子操作による祖先形質復元の試み -

自然史的染色体研究から Evolutionary Genomics へ

動物媒植物の性表現進化についての理論的研究

オオバギ属と共生アリにおける種特異性の維持機構

繁殖をめぐる送粉者と生物間相互作用

- サクラソウとトラマルハナバチを例に -

横山 潤（東北大）

石川 寛（千葉大・理・生物）

谷田辺洋子（京大・理・植物）

青木誠志郎（東大・総合文化）

三島美佐子（基生研・種分化第 2）

佐藤 永（九大・農）

村瀬 香（名古屋大・農）

松村千鶴（筑波大・生物科学）

シンポジウム体験記 2

東京大学 総合文化研究科（広域システム科学）博士課程 日江井香弥子

20 世紀後半、人類は「時間・空間」をせばめるためのあくなき追及を続け、空間的に離れた人と、同時に接触できる「インターネット」なる手段を手に入れた。おかげで世界中の離れた場所に住んでいても、時間差を感じることも、空間的に離れていることも意識することなく、意見交換ができるようになった。それも、一般の人が普通に参加できるようになってきている。この技術を確立するには、数え切れないほどの技術開発が行われ（あるいは葬られ）、さまざまな分野の知恵が結集されたことであろう。コンピュータを中心に発達したこの科学技術の進歩には本当に驚かされる。

私は工学部に籍をおいていた 20 代のころ、人間のあくなき追及は「空間距離を縮めること」に飽和してきたら、やがて「時間」にむけられていくだろう、とぼんやりと考えていた。しかし、そんな「タイムマシン」があるわけではないし、時間をいじるとはどういうことだろうか、おとぎ話のような分野に科学者は積極的に手を出すのだろうか、と具体例が思い浮かばなかった。結局は無理であろう、と冷めていた。このことはもうずっと長いこと脳裡から忘れ去られていた。

それが今回の種生物学シンポジウムに参加して驚いたのは、「時間に手を出す」ことが全くの夢

ではないこと、そういう意志を持って研究している人が目の前で発表をしていることだった。折しも「種生物学の 21 世紀をうらなう」と題したシンポジウムにおいてのことであった。進化の過程で捨て去られ、葬り去られた「種」を、遺伝子の導入という手段で復元しようとする「意識」を持った研究者が、目の前で自分の研究成果を発表し、自分の研究の夢を語っている！ジェラシック・パークの世界が夢物語ではなく、すぐそこまで来ていることを強く感じた。

人は時間を自らの意志通りに操作することはできないから、今までは化石によって長い長い年月をかけた進化を検証してきた。今現在の生物を研究するときも、できるだけ時間的な相違を空間的な代替手段で対処しようと試みてきた。それを、遺伝子導入によって失われた「種」の復元が試みられ、進化の長い過程が解明されていくことを、研究者が欲すれば実験できる時代になってきている！確かに時間を直接操作する方法ではないが、「タイムマシン」ができるまでの間、この技術はどんどん使われていくのだろう。

私自身はフィールドワーク主体の、現場で行われていることを観察することから始まる泥臭い仕事をやりたくて、電子材料の開発から足を洗って、この分野に首を突っ込んだ者である。だから、

ひとつずつフィールドワークを重ねていく丁寧な研究や、形態の観察から始まる生活史解明、種の起源解明などの話題には親近感を感じている。しかし、今や誰もが遺伝的な情報に興味を持ち、簡単に実験に取り入れていくことができる。モデルを考えるレベルもゲノム間のコンフリクトを考える、というようにより細かい方向に向かっている。確かに今までよりも、より細かい次元の話ができるようになっていくのだろう。今や使える手段は格段に広がったといえる。染色体の研究も自然史的研究からゲノム単位の、遺伝子単位の研究

に変革していくという。しかしながら、人間の目で識別できる範囲の仕事は、科学研究への興味の入り口だから、今後も廃れることはないのではないか、と私は考えている。

今回のシンポジウムは、日々進歩していく技術を背景として、可能となる研究体系の変化を予測させながら、今までの私たちの研究方法から得られる情報の興味深さをも、今一度思い出させる面白い企画だったと思う。まさに21世紀幕開けにふさわしい話題提供であった。

ポスターセッションの記録

- P-1 強風寒冷地に植林されたアカエゾマツの生理特性
香山雅純・北岡哲（北大・農）、秋林幸男・北里元・杉下義幸・佐藤冬樹・笹賀一郎・松田彌・小池孝良（北大・農・演習林）
- P-2 葉の光合成光順化に解剖学的性質の変化は必要か
小口理一・彦坂幸毅・広瀬忠樹（東北大・理・生物）
- P-3 ゼンテイカ種子の後熟性
鈴木貢次郎（東京農業大・地域環境科）
- P-4 オオハマボスの発芽フェノロジーとシードバンク形成
市川百合子・工藤洋・可知直毅（都立大・理・生物）
- P-5 アレチヌスピトハギにおけるハキリバチの訪花行動 ～訪花直前の行動と滞在時間～
後藤晴美・川窪伸光（岐阜大・農・多様性生物）
- P-6 シャクチリソバの種内変異に関する研究
山根京子（京大・農）
- P-7 ソバ属自殖性野生種の雌葉・雄葉長の種内変異
大迫敬義・大西近江（京大・農）
- P-8 イヌタヌキモは雌性両全異株か
荒木悟（島根大・汽水研セ）
- P-9 植物繁殖生態学における AFLP の利用法 –クローン識別・父性解析・性比の解析–
陶山佳久・木村恵・齋藤智之・上野直人・清和研二（東北大・農）
- P-10 森林の更新様式が林床草本カニコウモリの遺伝的空間構造に与える影響
杉阪次郎・工藤洋・可知直毅（都立大・理・生物）
- P-11 同所的に分布するチガヤ集団間の交配隔離
水口亜紀・西脇亜也（宮崎大・農）
- P-12 食べられることに意義がある？ –葉切除後に見られる光合成能力の補償効果–
松木佐和子（北大・農・環境資源）、小池孝良（北大・農・演習林）
- P-13 木本性クローナル植物ポポにおける食害のラメット間比較
穂坂尚美・工藤洋・可知直毅（都立大・理・生物）、Ilka C. Feller (SERC)
- P-14 二年草オオハマボスにおける死亡の季節変化に対する種内競争と環境不均一性の効果

種生物学会総会資料

日時：2001年2月10日

場所：八王子大学セミナーハウス

庶務報告：

(1) 役員選挙結果

2000年12月26日九州大学理学部において、渡邊邦秋、副島顕子両氏の立ち会いのもと、種生物学会会長、副会長及び幹事（任期：2001年4月～2004年3月）の選挙開票を行った（投票総数75・有効投票数75）

<会長> 森田竜義

<副会長> 伊藤元巳

<幹事> 北海道... 大原 雅
東北... 横山 潤、牧 雅之
関東... 鷺谷いづみ、堀 良道、工藤 洋
中部... 井上 健、川窪伸光
近畿... 角野康郎、小菅桂子、林 一彦
中国・四国... 鈴木和雄、中越信和
九州・沖縄... 堀田 満

(2) 大学評価・学位授与機構委員会の推薦結果

<教育評価専門委員> 広瀬忠樹

<研究評価員> 鷺谷いづみ

(3) 英文誌編集発行状況

2001年 No.1は入稿が済み、今春、会員に配布される予定。現在は2001年 No.2を編集集中。

(4) Blackwell Asia 社からの報告

- On line journal の購読数

昨年 250 件 → 今年は 1000 件以上へ

- 今年夏には、会員に On line journal のパスワードを配布

- Citation Index (Web of Science) への登録を今年申請する

- 6月の契約更新で、会員あたりの単価を8,500円から9,000円程度に値上げしたい

(5) 和文誌編集発行状況

23号（1999年度分）を近々会員に発送。

24-25号（2000-01年度分）発行は今年の後半となる。

(6) 文一総合出版からの報告

23号（1999年度分）の印刷部数減（2500→2000）、ページ増により、学会の500部買取価格は、約70万円となる

(7) 次期種生物学シンポジウムの開催地

日時：2001年12月7-9日

場所：八王子大学セミナーハウス

承認事項

新執行部

<会計幹事> 林 一彦

<庶務幹事> 芝池博幸

<英文誌編集委員長> 原 登志彦

<英文誌副編集委員長> 大原 雅、工藤 岳

<英文誌名誉編集委員長> 河野昭一

<和文誌編集委員長> 川窪伸光

会計報告：

<2000年度決算>

2000年度種生物学会収支決算（1999年12月8日から2000年12月31日分）は、2001年2月7日に監査のうえ適性と認められ、2001年2月20日の総会において承認された。1999年度繰越金を含めて8,708,293円の収入があり、2000年度支出総額6,086,038円を差し引いた結果、2,622,255円の2001年度への繰越となり、見かけでは黒字決算となった。しかし、これは当年度英文誌出版費の決済が完了しなかったこと、発刊予定であった1999年、および2000年の和文誌の出版が遅れたこと、この2点により約600万円の支出が執行されなかったことを考えると、本来であれば大幅な赤字となるべきところである。

会費収入については、予算額の7割に留まり例年よりも減額した。この減額分は、例年であれば年末に先払いされる来年度会費額分に相当し、2000年11月の選挙・シンポジウム案内の配送時に、シンポジウム参加費の振込用紙との混乱を避けるために会費用振替用紙を同封しなかったため減額したものと考えられる。会計業務の不備のために御迷惑をおかけしたことをお詫びする次第である。バックナンバーの売り上げ収入がなかったことも、販売促進の方策をあげなかった幹事会の責問されるべき点かと思われる。

支出では和文誌出版業務が滞ったために、出版委託費のほかに発送費において約40万円の支出減額があった。他の支出項目はほぼ予算とおりの執行が行なわれた。

<2001年度予算>

収入の部について、会費収入の試算は例年とおりの算出方法で行い、他の項目については、過去数年間の決算額を参考に計上した。ブラックウェル社からの還付金は2000年度実績のからのものである。見込まれる不足額は、片岡基金利息と基金本体より繰り入れ予定とした。

支出の部については、出版委託費の部分をのぞいてほぼ例年とおりの計上である。出版委託費について、英文誌出版費は2000年と2001年分の支出を予定している。また和文誌について、ページ増のために1999年和文誌出版費に20万円の追加分があり、2000・2001年の和文誌が合併号となったため、この24・25合併号のための70万円の出版費を計上した。

総会において2001年度予算案を承認いただき、会員の皆さまの御理解に深謝致します。

「種生物学研究」の著者割引購入

現在、「種生物学研究」は学会の機関誌として会員の皆様に配布される一方、文一総合出版によって書店でも販売され、非会員の方々にも購入の道が開かれています（既刊：花生態学の最前線、森の分子生態学）。

この度、文一総合出版のご厚意で、会員の皆様が「種生物学研究」を購入する際には、著者割引価格が適用されることとなりました。したがって、非会員の方々も会員を経由することで、よりお求め易い価格で「種生物学研究」を購入することが可能になります。お近くで、種生物学研究の購入を希望する方がいらっしゃいましたら、会計幹事までお問い合わせ下さるようお願いいたします。

ぜひ、このシステムをご利用下さいませ。

資料1：

<種生物学学会2000年度決算報告>

収入		支出	
会費	3,403,000	印刷費	66,360
(00年分)一般	2,351,000	Newsletter20	32,760
(00年分)学生	115,000	Newsletter21	33,600
(滞納分)一般	882,000	出版委託費	5,388,000
(滞納分)学生	55,000	1999年英文誌出版費	4,888,000
購読料	188,707	1998年和文誌出版費	500,000
バックナンバー	0	1999年英文誌出版費	4,888,000
預金利息	721	1998年和文誌出版費	500,000
学術協会著作権	58,613	発送費	40,410
Blackwell社からの還付金	0	Newsletter郵送費	40,410
超過ページ代	304,800	事務費	182,216
片岡基金利息分繰入	0	和文誌編集・発送	10,920
片岡基金取崩繰入	0	英文誌編集	110,739
		その他	60,557
		英文誌編集事務補助	0
		シンポジウム補助金	100,000
		自然史学会連合分担金	40,000
		会計監査交通費	2,880
		選挙関連経費	236,172
		名簿等印刷費	123,450
		発送費	107,520
		その他	5,202
		名簿作成補助謝金	30,000
小計	3,955,841	小計	6,086,038
前年度繰越金	4,752,452	次年度繰越金	2,622,255
合計	8,708,293	合計	8,708,293

資料 2 :

〈種生物学会 2001 年度会計予算〉

収入		支出		
会費	5,755,500	印刷費	65,000	
(01年分) 一般	2,620,000	Newsletter印刷費	65,000	
(01年分) 学生	140,000	出版委託費	11,084,500	
(滞納分) 一般	2,658,000	2000年英文誌出版費	4,834,500	PSB15巻, 既刊
(滞納分) 学生	337,500	2001年英文誌出版費	4,850,000	PSB16巻, 未刊
購読料	200,000	1999年和文誌出版費	500,000	23号, 未刊
バックナンバー	50,000	1999年和文誌出版費追加	200,000	ページ増のため
預金利子	800	2000・2001年和文誌出版費	700,000	24・25合併号, 未刊
学術協会著作権	60,000	発送費	380,000	
Blackwell社からの還付金	67,000	Newsletter郵送費	80,000	NL22, 23
		1999年和文誌郵送費	150,000	
片岡基金利息分繰入	1,111,556	2000・2001年和文誌郵送費	150,000	
片岡基金取崩繰入	2,600,000	事務費	382,610	
		和文誌編集・発送	25,000	封筒代
		英文誌編集	257,610	含未払分: 97610
		その他	100,000	
		英文誌編集事務補助	384,000	註3
		シンポジウム補助金	100,000	1997年1月
		自然史学会連合分担金	20,000	01年
		会計監査交通費	2,880	2000年度分
小計	9,844,856	小計	12,418,990	
前年度繰越金	2,622,255	次年度繰越金	48,121	
合計	12,467,111	合計	12,467,111	

* * * * * 2002 年度からの会費値上げのお知らせ * * * * *

種生物学会では1999年より英文誌「Plant Species Biology」と和文誌「種生物学研究」の出版をそれぞれブラックウェル社と文一総合出版に委託し、電子ジャーナル購読数の増加や増刷など、委託による成果が徐々に報告されるようになってまいりました。しかし、学会側への還元にはもうしばらく時間がかかり、契約更新による契約金の値上げ、質的向上のためにやむをえず追加となった出版費など、当初の見込みからやや投資額を増大しなければならない状況にあります。出版委託にともない、片岡基金とその利子を委託費の不足分に充当することを承認いただいておりますが、このまま年々累積する赤字の補填にあてていくことに

は、献金いただいた志尚や会員の皆さまの意志と齟齬をきたす憂慮がでてまいりました。そこで今回、総会において会費の値上げを提案し、御承認いただきました。会員の皆さまに御負担をお願いすることになりましたが、和英両雑誌とも期待を裏切らない納得していただけるものをお届けできると信じております。どうかやむをえない会計状況を御理解いただき、会費値上げに御協力いただけますようお願い致します。

2002 年度より

一般年間会費 12,000 円

学生年間会費 6,000 円

PLANT SPECIES BIOLOGY

新・英文誌編集委員長就任

原 登志彦 (北海道大学・低温科学研究所)

このたび、河野昭一・前編集委員長から編集委員長を引き継ぐことになりました。これにともない、これまで私と共に副編集委員長を勤めてこられた村上哲明さんに代わり大原雅さんと工藤岳さん(共に北海道大学大学院・地球環境科学研究科)に新しく副編集委員長としてご協力いただくことになりました。また、編集委員メンバーにも若干の変更をお願いしました。長年、編集委員を務めていただいた Spencer C.H. Barrett さん、Jonathan Silvertown さんに代わり、Michael J. Hutchings さん、James D. Thomson さんに新しく編集委員として加わっていただくことになりました。村上哲明さん、Spencer C.H. Barrett さん、Jonathan Silvertown さんには長年にわたり Plant Species Biology の発展にご努力いただいたことに心より感謝いたします。また、河野昭一・前編集委員長には、William F. Grant さんと同じく名誉編集委員長として今後とも Plant Species Biology の発展にご協力いただく予定です。

Plant Species Biology の第一巻が発行されたのは 1986 年でした。早いもので、今年で 16 年目になります。私はその第一巻から編集委員として発行に携わってまいりましたが、約 10 年続いた懐かしい赤白の表紙から、出版が Blackwell Science に変わり写真入のカラフルな表紙へと変わり、また国際的にもその知名度が上昇してきております。Plant Species Biology は、植物の集団生物学、系統分類学、繁殖生物学、ポリネーション・バイオロジーなどを専門に扱う学術誌としては世界的にもユニークな存在になっています。このような Plant Species Biology が今後とも世界的な一流学術誌として発展してゆくためには、会員の皆様からのアイデア豊かで斬新な論文の投稿が不可欠です。毎年の種生物学シンポジウムに出席していますと、そのポテンシャルを持った会員の皆様が多い学会だと感じていますので、是非とも Plant Species Biology への投稿をお願いいたします。新編集体制でもこれまでどおり、「迅速丁寧な編集」をモットーに国際的な一流学術誌を目指して努力を続ける所存ですので皆様のご協力よろしくをお願いいたします。

種生物学研究

編集の進捗

川窪 伸光(岐阜大学・農学部)

嬉しいお知らせです。今年 2 月に出版しました「森の分子生態学」は、売れ行き好調で、4 月中旬に重版を決定しました。それにともない、同書の執筆陣に文章の修正部分チェックをお願いし、執筆陣には快諾していただきました。その後、在庫は、予想を上回るペースで売れ、5 月下旬現在、在庫切れの状態です(注文は受け付けています)。文一総合出版社の迅速な対応により、6 月初旬には、重版分が市場にでまわる予定です。しかしながら編集委員会としては、あまりに早い売り切れは嬉しい誤算で、短期間でも在庫切れが生じてしまったことは少々残念でした。

さて、昨年のシンポ分の単行本「保全と復元の生物学(仮題)(矢原徹一責任編集)」の原稿は、ほぼ揃い、現在、編集作業を進めています。今後、執筆陣と協議しながら、年内の発行を目指します。また、今年度のシンポの「光と水の植物生態学(仮題)(可知直毅責任編集)」も、原稿が着々と集まり、具体的な編集作業に入りつつあります。

既刊「花生態学の最前線」も、すこしずつ売れ続け、残部僅かとなってきています。編集委員会でも販促に努めるつもりですが、今後も皆さんの「教科書指定」や「図書館購入」などにおける、ご協力を宜しくお願いいたします。特に、周辺の方から、「森の分子生態学」についての問い合わせがありましたら、是非「花生態学の最前線」もご紹介ください。

今後も、和文誌編集委員会は、学会員が読みたくなる内容で、かつ書店でも一般の読者を獲得できるような、良質の単行本を発行していけるよう努力していくつもりです。新執行部(2001 から 03 年)の和文誌編集委員は以下の 11 名です。和文誌の編集に対する要望がございましたら、最寄りの編集委員へぜひともお伝えください。

大原雅(北大)・工藤岳(北大)・酒井聡樹(東北大)・陶山佳久(東北大)・横山潤(東北大)・綿野泰之(千葉大)・工藤洋(都立大)・三島美佐子(岡崎基生研)・矢原徹一(九大)・西脇亜也(宮崎大)・川窪伸光(岐阜大)

書評

小川 潔 著：日本のタンポポとセイヨウタンポポ（どうぶつ社）
保谷彰彦（東京大学大学院・総合文科研究科）

外来種が増加して近縁の在来種が減少する事例はタンポポをはじめいくつも知られている。タンポポで見られるこのような交代現象は、原因や実態が不明のまま駆逐説としてマスコミなどに取り上げられてきたこともあり、外来種タンポポは強く競争の結果として在来種を駆逐していると考えがちである。本書ではこの交代現象の真相をいくつものデータに基づいて解明している。その解明には市民参加型のタンポポ調査による結果も貢献しており、環境教育や市民ボランティアによる環境指標生物の調査が学術的な意味を持つ好例に思われる。本書はタンポポについての興味深い知見が得られるだけでなく、市民参加型のタンポポ調査の具体的な方法やデータのまとめ方も書かれているため、学校での環境教育・実習などでタンポポを材料として調査・研究する際にもとても参考になるものと思われる。

ところで、私たちの身近にあるタンポポはおおまかに二つに分けられる。自家不和合性で他殖を行う在来種タンポポと無融合生殖を行う外来種タンポポである。変異が連続的で分類が難しいタンポポだが、現在日本のタンポポは15種類に分類されるそうである。外来種タンポポはセイヨウタンポポに該当する種群とアカミタンポポに該当する種群とに分けられるが、原産地ではそれぞれ約1000種と約500種の小種として記載されており、その細かさに驚かされる。なお日本に帰化した種の詳細は不明である（第1章）。

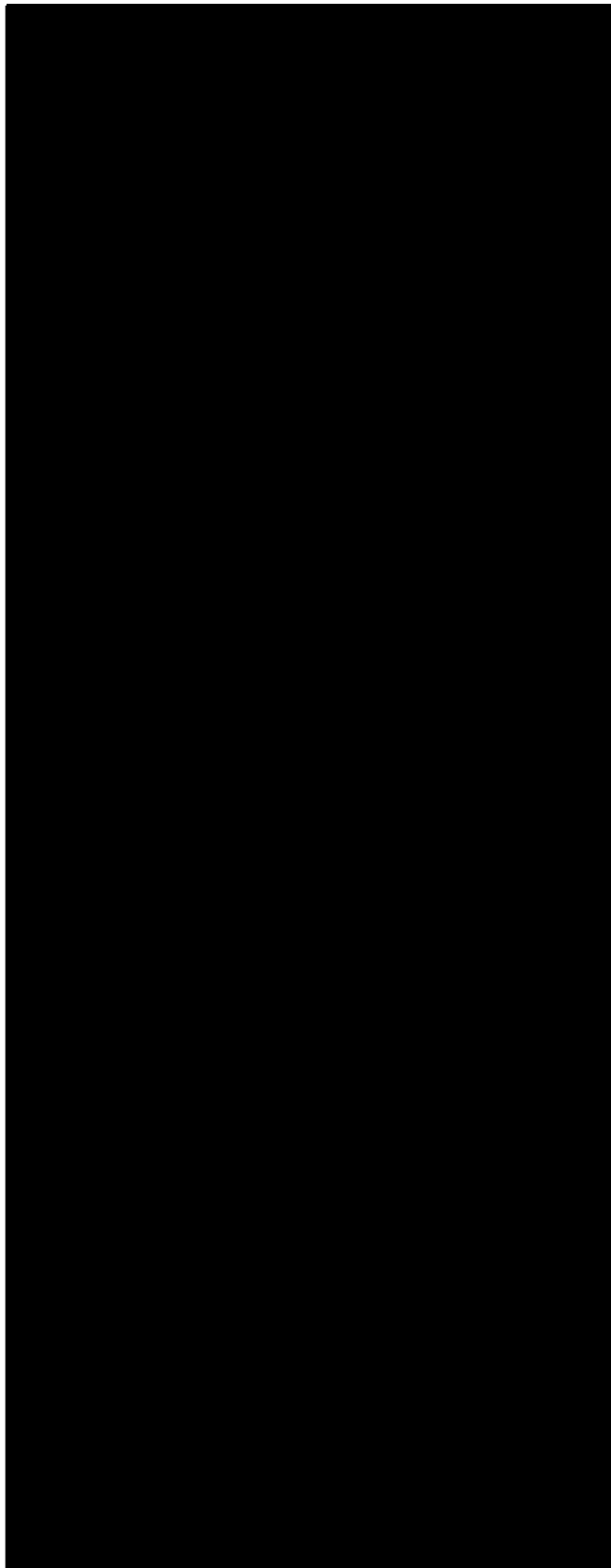
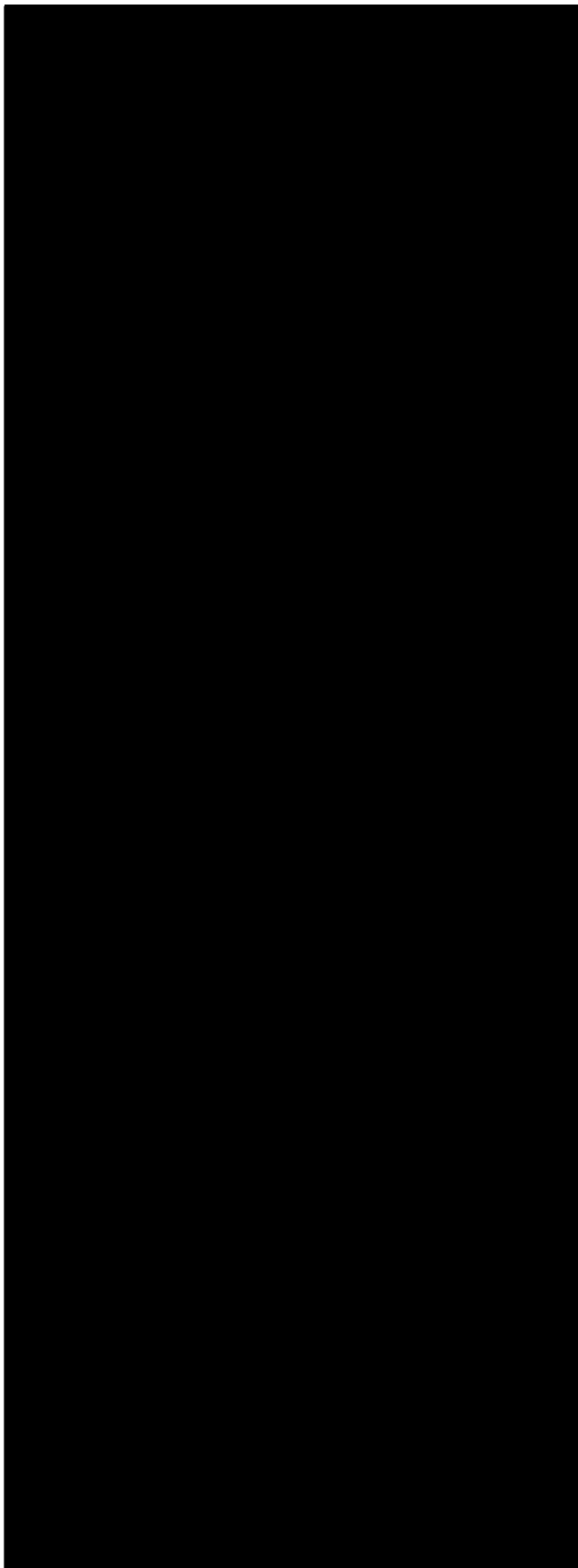
これらの在来種と外来種の分布域や出現頻度について著者等が中心となって行われた南関東における「タンポポ調査」の結果を詳細に解析（第2～4章）すると、1978、1980年の調査から両種の生育地は人間による土地利用形態と密接に関連しており、都市化に伴い植物相が単純になった主に都市部の土地には外来種が、共存植物が多くて比較的保存された主に郊外の土地には在来種が出現していた。1990年のタンポポ調査から10年間の推移を出現頻度で比較してみると郊外において外来種は変化していないが、在来種はその生育拠点であった農業的環境の減少に伴って激減している様子が浮かび上がった。

両種の生育地特性の違いを解明するために、生活史についても検討している（第5、6章）。共存

植物が繁茂する夏季に休眠して、共存植物が枯れる9～12月に発芽することで生育地に適応している在来種タンポポに対して、裸地での生活に適応している外来種では主に6月に発芽した。また、実生期以降も在来種は夏に葉を落として休眠することで共存植物が繁茂する時期を過ごしているのに対して、外来種は夏も地上部の成長を続けており裸地での生活に適応していた。実生の生残率に関しては、外来種では初夏の実生はほとんど死亡するがわずかに残った実生と秋にわずかに発芽した実生が生き残った。在来種は実生が分散して発芽することにより他の植物と共存し環境の変化に対応していた。

以上をまとめてタンポポの交代現象を考察すると（第7章）、一個体でも子孫を残せる外来種タンポポは多量の種子を作ることによって実生の死亡率の高さを補い、また共存植物の少ない生育適地が人間活動により増え、比較的軽い果実はより遠くの適地まで到達できるためにその勢力を拡大する。一方、在来種タンポポは安定した種子稔性を得るためには群れを作る必要があるが、土地利用形態の変化に伴う生育地の消滅や分断化のため、種子稔性が低下して個体群を維持できなくなる。交代現象はこのような生活の違いに伴う生育地の差異が、土地改変により増幅されてきたのだ。これらのことからタンポポは環境の複合的な状況を反映した環境指標生物とも言える。つまり外来種タンポポは自然破壊の指標であり、在来種タンポポは自然保護の指標と考えられる。また、今後の課題として、在来種の生育地も含めた保全や復元、雑種形成の問題が取り上げられているが、いずれも保全生物学的にも注目されている問題である。

新入会員
会員異動



<住所録のミス>

2000年発行の住所録では下記の方の所属に間違いがありました。お詫び申し上げますとともに、ここに訂正いたします。



会費納入のお願い

種生物学会の年会費は、前納制になっています、2001年度の会費は一般会員10,000円、学生会員5,000円(初年度のみ3,000円)です。まだ御納入いただいていない方はお振り込みいただきますようお願い致します。なお、学術振興会の奨励研究員の方は一般会員あつかいになります。本会の方では把握し切れませんので、自己申告でお支払いください。

会費納入状況は、PSBやニューズレターなどの送付封筒の宛名ラベル右下に完納年度を数字で示してあります。

(例)「-01」とあれば、2001年度分まで完納です。

(例)「-00」とあれば、2000年度まで納入されていますので、2001年度分をお支払いください

(例)「-99」とあれば、1999、2000、2001年の3年分をお支払いください。

ただし1999年度分までは年会費は8,000円です。よって「-99」とある場合には、28,000円(8,000+10,000+10,000)をお願い致します。

このほかにプラス記号「+」と数字が組合わされている場合があります、これは表示されている完納年度に余剰があることを示してあります。

(例)「-00 + 3000」とあれば、2000年度まで完納ですが、2001年度は3000円しか納入されていません。よって不足分の7000円をお支払いください。会費納入状況をお確かめのうえ、下記の口座に不足金額を納入ください。

郵便振替番号：01030-3-21704

口座名義：種生物学会

(ご注意) ※今回表示されている納入状況は2001年5月末までの入金分です。入れ違いにお振り込みいただいた場合には御容赦ください。※郵便振替時の受領証は正式な領収証として認められます。できるだけ領収書発行の別個依頼は御遠慮いただければ助かります。※発送作業の都合で完納されている方にも振込用紙が同封されています。2001年度会費の納入にお使いください。御不明な点などございましたら、お手数ですが会計幹事まで御連絡ください。

各種連絡先

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読申込

〒564-8511

吹田市岸部南2-36-1

大阪学院大学経済学部生物学研究室

林 一彦

電話：06-6381-8434

ファックス：06-6382-4363

電子メール：lilium@utc.osaka-gu.ac.jp

PLANT SPECIES BIOLOGY への投稿

〒060-0819

札幌市北区北19条西8丁目

北海道大学低温科学研究所 原 登志彦

電話：011-706-5455

ファックス：011-706-7142

電子メール：

t-hara@orange.lowtemp.hokudai.ac.jp

ご意見、ご質問、その他

〒950-2181

新潟市五十嵐二の町8050

新潟大学教育学部生物学教室 森田 竜義

電話：025-262-7154

ファックス：025-264-2026

電子メール：morita@ed.niigata-u.ac.jp

編集後記

執行部の交代に伴い、ニューズレターの紙面を一新いたしました。ことの顛末は、川窪和文誌編集委員長から譲り受けたファイルを、私のコンピュータで開くことが出来なかったことによります。シンプルな紙面ゆえ、内容の一層充実に努め、学会活動をサポートしてゆきたいと考えています。会員の皆様のご要望を実現するためにも、ご意見ご質問等、どしどしお寄せ下さい。

最後に、ニューズレターのレイアウトをお手伝い下さったYSさん、ありがとうございました。

(芝池)

編集兼発行人

印刷所

発行所

新潟市五十嵐二の町8050 新潟大学教育学部生物学教室 森田竜義

新潟市東湊町通三ノ町2569 (株)小林印刷所

新潟市五十嵐二の町8050 新潟大学教育学部生物学教室 種生物学会